

2009年に中国で出土
した曜変天目について

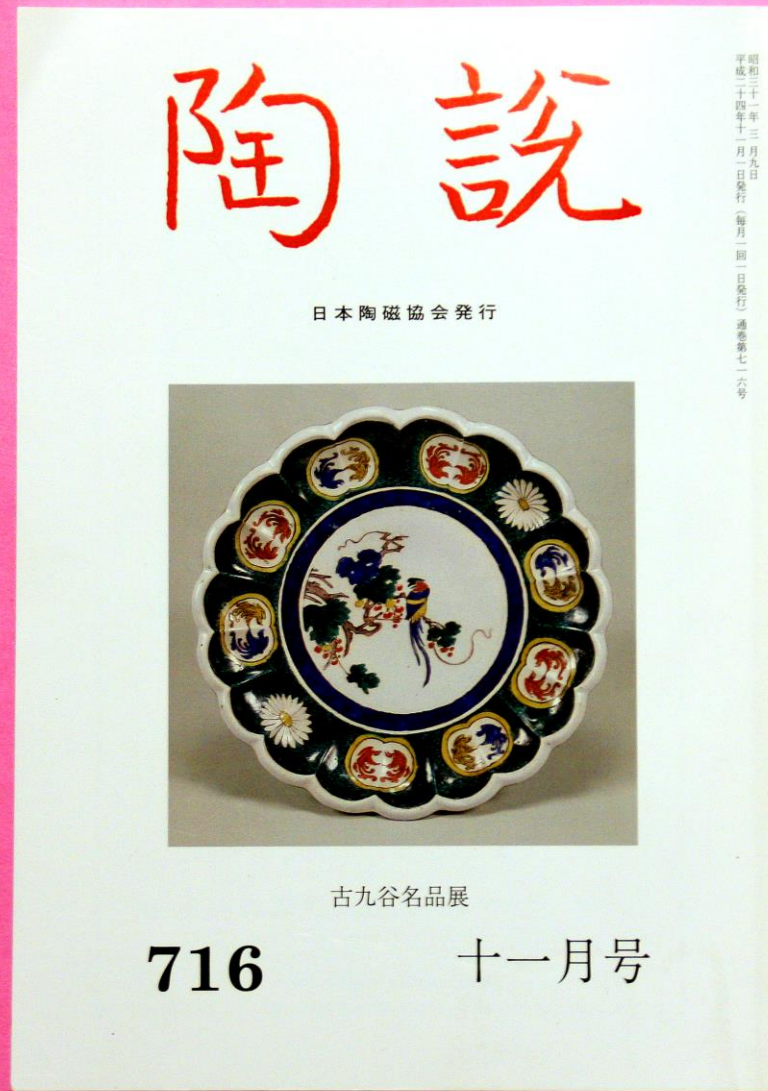
2009年に中国・杭州市の工事現場で曜変天目が出土し、2012年にそれが公表されるや、これは陶芸界における大発見で、この分野では、非常に大きな反響を呼びました。なにしろそれまでは曜変天目は4碗しか現存しておらず、しかもその全てが日本にあり、そのうちの3碗が日本の国宝となっている超貴重品だからです。

さらに曜変天目は、日本では茶碗の中で最上位に位置する最高級品であるのに、謎だらけの茶碗で、たとえば①誰が作ったのか、②その用途は、③日本への伝来の仕方は、④原産地の中国になぜ全く存在していなかったのか、などです。

重要文献の紹介 その1

『陶説』 716号 40～43ページ
(平成24年)

その『陶説』716号の表紙 (田口寛の蔵書)



21x15cm, 本文総ページ数:114ページ

この中国で出土した曜変天目について、『新発見の杭州出土曜変天目茶碗』と題する玉稿を、大阪市立東洋陶磁美術館主任学芸員の小林 仁 氏が、日本陶磁協会発行の月刊専門誌『陶説』（716号、平成24年11月1日発行）の40～43ページに書いておられるので、その要点を以下に紹介します。この本の最初の方にある写真ページの最後の2ページに、この出土品の破損断片の復元写真がカラーで4枚掲載されています。なおこの『陶説』に関しては、日本陶磁協会の森 孝一 氏と私の親友で伊賀焼の名工の谷本 景 氏の格別のご配慮とご協力を得ましたので、ここに記して謝意を表します。

以下は全て小林 仁 氏のその原稿の要点の抜粋です。

……この曜変天目は、2009年上半期に杭州市上城区で出土したもので、越窯、定窯、建窯、吉州窯、汝窯、鞏義窯、さらに高麗青磁等の多くの破片が同時に出土した。この場所は、江城路と上倉橋路の交差する場所で、南宋皇城遺跡からも程近く、また南宋時期この一帯は主要な官衙が集中しており、その中でもここは都南宋臨安の都亭駅(迎賓館)に当たる場所のようである。

出土品の中でも越窯白磁が数量的には群を抜いており、これらの釉上や釉下には「御厨」、「苑」、「後苑」、「殿」、「貴妃」、「尚薬局」等の刻銘が見られるものも少なからずあることから、これらの出土品が南宋宮廷用のものであることがうかがえる。

したがって、中国のしかも消費地遺跡では初めてとなるこの曜変天目茶碗も南宋宮廷用に献上された可能性が高く、南宋当時においても曜変天目は極めて珍しく、その完品が宮廷にもたらされていたことを示す有力な証拠となるものといえよう。建窯産天目茶碗では、「供御」銘のあるものや、さらに高台及び高台脇の露胎部分に黒漆が塗られた珍しい資料も出土しており、曜変をはじめ建窯産天目の高級品や希少品が少なからず南宋宮廷にもたらされていた状況がうかがえる。

出土した曜変天目茶碗は、4分の1程度が欠損しているものの、高台はほぼ残存しており、茶碗の形も十分に分かる状態である。

見込みの曜変の斑紋は、ことのほか斑紋の鮮やかさで魅惑的な静嘉堂文庫美術館所蔵のものにも引けをとらない程、幻想的な光彩を見せている。胎土は建窯特有の真っ黒で、高台のつくりは伝世のものと同様であり、建蓋の中でも高台が極めて丁寧に削り出されていることが分かる。曜変天目が特段丁寧かつ精緻につくられた高級品であるということがこのことからもうかがえる。……

以上のさらなる詳細については、日本陶磁協会発行の月刊専門誌『陶説』（716号、平成24年11月1日発行）の40～43ページをご覧ください。

重要文献の紹介 その2

『**聚美**』5巻 86～95ページ

(2012年)

その『聚美』5巻の表紙 (田口寛の蔵書)



30 x 22.5cm, 本文総ページ数: 126ページ

上記の青月社発行のやきものの大判専門誌『聚美』に10ページにわたって、中国から出土した曜変天目について、現地の専門家が完璧に非常に詳細に書いておられます。全体のタイトルは『新出・曜変天目』ですが、その前半部には『杭州新発見の曜変天目について』と題して、杭州南宋官窯博物館研究員の方憶女史が現地での様子を実に詳細に執筆しておられます。実際にはその日本語訳が掲載されています。ここには復元された茶碗の写真はもちろんのこと、出土した工事現場の写真まで掲載されています。

この前半部の項目は以下のようです：

1. 曜変天目の発見

2. 出土地の考証
3. 曜変天目の概況
4. 曜変天目の評価

後半部では、専修大学講師の水上和則氏が『南宋古都杭州出土の曜変天目』と題して解説しておられます。ここには、下部に出土地の「都亭駅」の文字が見える杭州『咸淳臨安志』所載の「皇城図」(部分)も転載されています。この後半部の項目は以下のようです：

1. 日本伝世の曜変天目
2. 発見経緯について
3. 曜変天目であること条件について

4. 出土した黒釉残器が曜変天目であるか否か

とにかくこの文献は、微に入り細に入り非常に詳細に書かれており、出土した曜変天目に関する通常の解説書としては最高のものと思います。この曜変天目の詳細をお知りになりたい場合は、この全文をぜひとも読んでください。非常に参考になると思います。

現在の茶碗で最上位の静嘉堂文庫美術館の曜変天目は、かなりの使用感がありますが、この中国で出土したものは使用感があまりなく新品同様なので、なぜほぼ未使用のままに残っていたのかが、新たな謎のようです。

とにかく出土した曜変天目は、最高の出来栄えでとても美しい模

様があり、もしも完品であったら、茶碗全体の最高位にランクされると思いますが、工事で破損してしまったのは非常に惜しいことです。

今回の出土場所から、曜変天目は宮廷で接待用に使われていたものと思われ、この出土した曜変天目と日本にある曜変天目4碗の全ての各部分のサイズがほぼ同一であることから、私のホームページの別項にも書いておきましたが、曜変天目は宮廷御用達の名陶工が一人で全てを作ったのではないかと思われまます。そうでないとしても、各部分のサイズがほぼ同一であるということは、そのサイズの規格が厳密に決められていたということで、やはり曜変天目は特別の茶碗であり、今回の出土場所から、使途がほぼ特定できます。

古越会館に関する追補

(2016年8月30日記)

2009年に中国で出土し、古越会館に保管されている曜変天目の実物をぜひ見たいので、どうすれば見れるかをよく考えてみたところ、中国の南京大学の教授(日本語も流暢)をしている先生と非常に親しく、毎年の夏休みには私の研究室への定期的な訪問もあり、今年(2016年)の1月の始めにニューヨークでも会いましたが、その先生に古越会館へ直接電話して聞いてもらおうとなり、頼んでみました。その結果は下記のようなようです。

古越会館は古代の越州(現在の浙江省)の骨董品を扱う愛好家たちの団体で、展示室を持っていないため、すべての骨董品は銀行に保管されています。

同会館は2012年に浙江省博物館で、及び2014年に温州市博物館で、一部

の骨董品を展示したことがあります。この曜変天目を展示したことは一度もありません。

その曜変天目の写真(次ページに示す)をいただきましたが、この茶碗は一般には公開しません。しかしある特別の条件を満たせば見せてくれるようですので、今後がんばってみます。不可能ではありませんが、困難な条件です。南京大学と古越会館は、車で2時間くらいの近い距離(中国の広大な国土からすればすぐ隣町)ですので、その時はその先生に案内してもらおうことになっています。持つべきは良き親友ですねー。



2009年に中国で出土し、現在は古越会館が所蔵している曜変天目
(中国から送ってもらった写真)

完